

『金剛頂経』は「悟り」を テーマとしているのか？

— 密教と現世利益 —⁽¹⁾

種 村 隆 元

はじめに

周知の通り『真実撰経 (Sarvatathāgatattvasaṃgraha)』（『初会金剛頂経』、以下『金剛頂経』と表記）は、真言宗における両部の大経の一つであり、成仏に至る教理および実践を説くものと理解されている。

また、これまでに出版されている研究書や概説書等の二次文献におけるインド密教史の記述は、『大日経』『金剛頂経』をもって、中期密教の時代に入るとされている（かくいう私自身もこれまでこのように記述している⁽²⁾）。これは『大日経』『金剛頂経』が、これまで主として「現世利益」を得るための手段であった密教的手法をもって、悟りを得るための手段を示した、ということがその理由づけになっている。

それでは、そのような紋切り型の理解は正しいのであろうか？『大日経』『金剛頂経』といった経典に説かれている実践の目的は、単に悟りを得ることだけなのであろうか？これが本小論で考えてみたい事柄である。その導入として、まず初期密教における「現世利益」について、簡単に触れてみたい。

初期密教経典にみられる「現世利益」

初期密教経典以来、密教の実践のゴールとして想定されているのがブクティ (bhukti) とムクティ (mukti) である。ブクティとは、現世あるいは来世において得られる超自然的な享楽や力のことである。このブク

『金剛頂経』は「悟り」をテーマとしているのか？

ティを得るための手段であるマントラを使用した諸儀礼が初期密教經典の主たるテーマである。またこのブクティが達成されることをシッディ (siddhi, 成就, 悉地) という。この成就の内容は、他者を従属させる・破滅させる、富の獲得、空を飛ぶ・一瞬のうちに長距離を移動する・姿を消すといった超自然的な力などである⁽³⁾。

以下、このような儀礼を『不空罽索観音神変真言経 (Amoghapāsākalparāja)』を例に見ていきたいと思う。

『不空罽索観音神変真言経』に見られる儀礼とその効果

周知の通り『不空罽索観音神変真言経』は不空罽索観音の諸マントラとそのマントラを使用する儀礼の集成であり、様々なタイプの密教儀礼を、サンスクリット語原典を通して知ることのできる貴重な文献である。サンスクリット語転写テキスト、preliminary edition、和訳註が大正大学総合仏教研究所の密教聖典研究会により継続的に出版されている。以下にサンスクリット語写本 folio 97v4以下に規定されている実践の概要を紹介することにする。当該箇所は、「不空罽索蓮華仏頂心髓秘密」というマントラを使用した諸儀礼とその効果が説かれている⁽⁴⁾。

1. 「不空罽索蓮華仏頂心髓秘密」を1回念想すると心と体が浄化され、すべての有情に対する悲・慈を有することになる。三悪趣に生まれることがない。(悪趣の回避)
2. 同マントラが2から7回唱えられるとさまざまな種類の病気が治癒する。また、不和・戦争・論争が鎮まる。(災厄の消除)
3. 学の律儀や戒の律儀を毀損した出家修行者たち、尊敬されずに亡くなった阿闍梨・和尚のすべての者たちのために、当該マントラが唱えられた砂を遺体が処置された場所にまくと、地獄に赴くことはない。(悪趣の回避)
4. 当該マントラを書いた樺皮を仏塔に入れると、仏塔の影を通過した者たちのすべての罪と障害が浄化される。(悪趣の回避)

5. 当該マントラを法螺貝に対して唱え、その法螺貝を鳴らすと、その法螺貝を聞いた者たちが天界に赴く。戒が清浄である者・菩薩の律儀を保持する者などは無上正等覚を得る。(天界の獲得、悟りの獲得)
6. 当該マントラを栴檀に唱え、焼香として使用するならば、その匂いを嗅いだ者たちは仏身を完成させる。(超自然的な力)
7. 同じ焼香を衣に薫じれば、その衣を着用した者の罪と障害が消える。衣を保持するだけですべての世界が思い通りになる。(災厄の消除、他者の従属)
8. 同様の衣を身につけて王宮に入ると、王妃とその取り巻きたちを自由にできる。また、仏教教団の中に入れば大いに尊敬され、大集団の中に入ると財産が増大する。(他者の従属、善や富の増大)
9. 当該マントラを唱えた焼香を神々に捧げることで、さまざまな神々が行者に仕え、その命令を実行する。また、この焼香には芥子や脱皮した蛇の皮など、刺激性のあるものや嫌悪をもよおすようなものも使用される⁵⁾。(神々の従属)
10. 都市の東西南北の4つの門で、当該マントラを唱えた焼香を捧げると、あらゆる争いが鎮まる。(災厄の消除)

以上例に挙げたものは、非常に大部の經典のほんの一部であるが、先に述べた初期密教の説くブクティのいくつかの特徴が見られる。またマントラの使用については、単純にマントラを唱えるだけではなく、それを物品に唱えることによりその物品にマントラの持つ力を付与するというのも、密教に特徴的なものである。また儀礼の効果として、ムクティ、すなわち無上正等覚の獲得に言及していることも確認できる、

またこれらの儀礼の効果、特に神々が行者に従属し、さまざまな享楽を与えてくれるようなこと、また上の概要には見られないが、隐身術の類いは、現代人の私たちの目には、ただの荒唐無稽なものに映るかも知れない。しかしながら、ここで言及した儀礼とその効果は中世に生きた人々の世界観と密接に関係しているようである。そのことを、同じく『不

『金剛頂経』は「悟り」をテーマとしているのか？

空罽索観音神変真言経』に説かれる「洞窟成就法」を例にして見たいと思う。

洞窟成就法

「洞窟成就法 (bilasādhana)⁶⁾」とは、通常では入ることのできない洞窟に、マントラのもつ力を用いて入り、そこでさまざまな成就を得る儀礼である。『不空罽索観音神変真言経』では、輪罽索 (cakrapāśa) という罽索を作成し、不空罽索のマントラとその罽索を使用することで、アスラなどの神々の世界や住居に入ることが説かれている。『不空罽索観音神変真言経』ではいくつかのヴァリエーションが説かれているが、ここでは「森にある洞窟に入る儀礼 (vanavidhisādhana)」の概要を見てみたい。

森にある洞窟（その中にはナーガの世界と宮殿がある）に入ろうとする場合は、持明者（行者）はよく沐浴をして、清らかな衣を身に纏う。森の洞窟の入り口で不空罽索のマントラ（心真言）を21回唱え、手にしていた罽索を手から放つ。その瞬間に森の洞窟にある世界の宮殿にいるすべてのナーガが持明者の前に控える。洞窟の中に誘われた行者が、不空罽索のマントラを唱えつつ中にはいると、その世界が6種類に振動する、森の中央に七宝でできた蓮池があり、その水は不老不死の妙薬である。

次に芥子に21回不空罽索のマントラを唱え池の中に投げ入れると、美しい娘が池の中から上半身を現す。その手には七宝でできた瓶を持っている。少女に邸宅に入ることを勧められたら、持明者は自らの望む成就を語る。その成就とは他世界を求めること、持明者の転輪王になること、世間的な成就＝超自然的な力の獲得、自己の快樂である。自己の快樂には、その少女が母、姉妹、あるいは召使いのように接するやり方がある。（中略）

自己の快樂を求める場合、持明者は少女の持っていた瓶を左手で持ち、右手で少女を抱き、壮麗な大宮殿 (mahābhavanavara) へ入る。その宮殿の中には蓮池があり、持明者はそこで少女と二人で沐浴する。持明者

はその水に触れた瞬間に持明者の転輪王 (vidyādharaçakravartin) となり、無数の持明者たちの眷属があり、1万カルパの寿命を有する。母を望むならば、少女は持明者を一人息子のように守ってくれる。姉妹を望むならば、少女は財宝や快楽を与えてくれる。召使いを望むならば、送り出す所がどこであってもそこに行き、メッセンジャーとしての役割を果たしてくれる。

まさにおとぎ話の一節を読んでいるようである。実は、これに類似した話はインドの説話文学などに見いだせる。ソーマデーヴァ著の説話集『カターサリットサーガラ (Kathāsaritsāgara) (物語の大海)』に含まれている「ヴェーターラパンチャヴィンシャティカー (Vetālapañcaviṁṣatikā) (屍鬼二十五話)」の第七話には、海を航行中に海中から出現した旗に向かって海中に飛び込んだ人物が、そこに神々しい都と黄金の宮殿を見だし、その都の主であるアスラの娘と結婚し、アスラの都の支配権を得るという記述がある。また、第十二話にも、海中から出現した如意宝樹を追って、海中に飛び込んだ王が、そこにある神々しい都でヴィドゥヤーダラの娘との享楽に耽る記述がある⁽⁷⁾。ここで詳細な検討はできないが、上述の洞窟儀礼と「屍鬼二十五話」に含まれる物語の背後には共通の世界観があることが容易に推測できる。

このような世界観は、初期密教経典や説話のみに見られるものではない。玄奘は『大唐西域記』の馱那羯磔迦国 (ダーニヤカタカ) の記述において、中観派の論師である清弁 (バーヴィヴェーカ) の旧跡である「バーヴィヴェーカが弥勒の説法を待つ場所」に言及している。

バーヴィヴェーカは自分の疑問が解決されるのは、未来仏である弥勒菩薩が成仏したときであると考へ、56億7千万年後の弥勒の説法を聴聞することを望む。バーヴィヴェーカが観音菩薩像の前で『随心陀羅尼』を唱え、穀物をたち、水を飲み3年が経過すると、観音菩薩が姿を現し、「ダーニヤカタカの城南の執金剛神像の前で『執金剛神陀羅尼』を唱えるならば、バーヴィヴェーカの願いが叶えられるという趣旨の言葉を述

『金剛頂経』は「悟り」をテーマとしているのか？

べる。パーヴィヴェーカは観音菩薩の啓示に従うと、姿を現した執金剛神がアスラの住居である洞窟を開けるための秘法を授ける。パーヴィヴェーカが芥子にマントラを唱えて岩に投げつけると、扉が開き、6人の者とともにアスラの住居に入っていった⁽⁸⁾。

玄奘が言及するアスラの洞窟とそれを開ける方法は、明らかに『不空罽索観音神変真言経』に規定されている方法と類似のものである。

『金剛頂経』「金剛界大マンダラ章」の説くブクティ

以上を前提とした上で、『金剛頂経』について少しく言及してみたい。『金剛頂経』第1章「金剛界大マンダラ」では、灌頂の規定の直後に「成就が生じるための印に関する智」と筆者が名付けるセクションがある。ここでは金剛界大マンダラにおいて灌頂を授かった弟子の希望に応じて阿闍梨が授ける実践を説いている。筆者は以前、このセクションのサンスクリット語テキストの再校訂版とそれにもとづく訳註を出版しているが⁽⁹⁾、いまここで和訳のみを提示する。

4. 成就が生じるための印に関する智

4.1. 四種類の成就を生じるための印に関する智

次に〔阿闍梨は、マンダラに入った弟子に以下のように〕言うべきである。「汝にとって喜ばしいもの〔＝望んでいるもの〕は、(1) 財宝の生起が成就するための智か、(2) 超自然的な力の成就の完成のための智か、(3) 持明者の成就の完成のための智か、あるいは(4) すべての如来の最上の成就の完成のための智のいずれか？」次にその〔弟子〕にとって喜ばしいものが彼〔＝弟子〕により語られるべきである。

4.1.1. 財宝の成就が生じるための印に関する智

次に、〔阿闍梨は〕財宝の成就が生じるための印に関する智を〔以下のように〕教授するべきである。

1. 宝庫のある場所を金剛杵の映像として心臓に観想するべきである。
〔宝庫のある場所を〕修習するならば、〔その〕土地に存在する宝庫

を発見するであろう。

2. 金剛杵の映像を〔観想上で〕描き、虚空に観想するべきである。〔その〕金剛杵の落ちるのが見えた場所に宝庫を予知するべきである。
3. 智慧ある人〔=実践者〕は、金剛杵の映像を舌の上に観想するべきである。〔そのようにすれば〕「〔財宝は〕ここにある」と自らの言葉で、最高の真実から語ることになる。
4. 憑依の状態に入り、自らの体全体が金剛の映像より成ると観想し、〔観想した金剛杵が〕落ちた場所に宝庫〔があると〕予知するべきである。

それら〔の4つの実践〕に関して、〔それぞれ〕以下の心〔真言〕がある。「金剛の宝庫よ!」「宝の宝庫!」「法の宝庫よ!」「行為の宝庫よ!」

*** 財産の獲得、財宝の場所の予知**

4.1.2. 金剛神通の成就を生じる印に関する智

次に、〔阿闍梨は〕金剛神通の成就を生じる印に関する智を〔以下のよう〕に教授するべきである。

1. 金剛の憑依が生じたら、水を金剛の映像より成ると観想するべきである。〔そのようにすれば、〕すみやかに成就し、水の上を動き回れるであろう。
2. まったく同様に憑依を引き起こし、自らがある〔尊格の〕姿をとると自ら観想するならば、自ら仏陀の姿にさえもなるのである。
3. まったく同様憑依された自分自身を、「私は虚空である」と自ら観想するならば、望む間〔自らの姿が他人から〕見られないようになるであろう。
4. 自ら金剛が憑依した状態になり、「私は金剛である」と観想するならば、〔自らの望む〕場所に登る間虚空に留まることになる。

それら〔の4つの実践〕に関して、〔それぞれ〕以下の心〔真言〕がある。「金剛の水よ!」「金剛の姿よ!」「金剛の虚空よ!」「私は金剛である!」

*** 水上歩行、隠身術、空中飛行**

『金剛頂経』は「悟り」をテーマとしているのか？

4.1.3. 金剛持明者の成就を生じる印に関する智

次に、[阿闍梨は] 金剛持明者の成就を生じる印に関する智を [以下の
ように] 教授するべきである。

1. 月の映像を [観想上で] 描き、空中高く上昇するべきである。
手のひらに金剛杵を観想するならば、金剛持明者となるであろう。
2. [観想で描いた] 月の映像に乗り、自らを、金剛宝を持つ者として
観想するべきである。[そのようにして] 自身が浄化された者は、
望む限り、一瞬にして [虚空に] 上昇することになる。
3. 一方、[観想された] 月の映像に乗り、掌中にある金剛蓮華を金
剛眼として観想するならば、[仏は?] 持明者の境地を与えること
になろう。
4. [観想された] 月輪の中であって、羯磨金剛杵を観想するべきで
ある。二重金剛杵 [= 羯磨金剛杵] を保持することで、迅速に羯磨
金剛杵の持明者となるであろう。

次に、[上の4つの実践における] 心 [真言] は以下の通りである。「持
金剛よ！」「宝を持つ者よ！」「蓮華を持つ者よ！」「羯磨金剛杵を持つ
者よ！」

* 持明者の位の獲得

4.1.4. すべての如来の最上の成就を生み出す印に関する智

次に、すべての如来の最上の成就を生み出す印に関する智を教授するべ
きである。

1. 虚空界において、すべての金剛の三昧を観想し、金剛を自性と
する者となった者は、望む限り一瞬間に [虚空に] 上昇すること
になる。
2. すべての浄化されたものの三昧を観想するならば、智慧を成就
させる者は、最上の五神通を迅速に獲得するであろう。
3. すべての虚空が金剛薩埵より成ると拡散 [のヨーガ] を行うな
らば、[実践者は] 堅固な念想を有し、迅速に自ら持金剛となるで

あろう。

4. 虚空界においてすべてが仏の影像からなると強く確信するならば、すべての仏の三昧が〔実践者を〕仏位へと導くであろう。

次に、これら〔4つの実践〕に関して、以下の心〔真言〕がある。「金剛よ！金剛よ！」「浄化されたものよ！浄化されたものよ！」「存在よ！存在よ！」「仏よ！仏よ！」

*** 持金剛位・仏位の獲得**

〔以上、〕すべての成就の智の完成である。

以上、4種類の成就とその実践法が説かれているが、そのなかで4.1.1～4.1.3は、超自然的な力の獲得を含めた現世利益であり、4.1.4に持金剛位および仏位の獲得⁽¹⁰⁾という「悟り」に関連する修法が説かれている。金剛界大マンダラは『金剛頂経』における根本のマンダラであるが、その実践の目的は、少なくとも経典の文面で判断する限りは、成就（悉地）の獲得にかなりのウエイトがあることが見て取れるのである⁽¹¹⁾。

おわりに

以上見てきたように、密教の実践のゴールにはブクティとムクティという2種類があるが、ブクティは初期密教の実践のみならず、『金剛頂経』の実践においても重視されていることが見て取れる。この傾向は、おなじ中期密教経典である『大日経』にも見られることであり、また『金剛頂経』以降の後期密教経典の時代になっても見られるものである。仏教史における密教の位置を考えると、私たちは密教実践のゴールとしての「現世利益」の役割を軽視するべきではないと考えるのである。

『金剛頂経』は「悟り」をテーマとしているのか？

参考文献

一次資料

Amoghapāśakalparāja. 密教聖典研究会1999, 2015.

Saravatathāgatataṭṭvasaṃgraha. 種村2020.

二次資料

和文資料

上村勝彦（訳）ソーマデーヴァ（著）. 1978.『屍鬼二十五話 — インド伝奇集 —』東京・平凡社. 東洋文庫323.

種村隆元. 2010.「密教の出現と展開」『新アジア仏教史 02 インド II 仏教の形成と展開』東京・出版社, pp.209-262.

種村隆元. 2019.「*Sarvatathāgatataṭṭvasaṃgraha*における āveśa について」『密教学研究』51, pp.31-53.

種村隆元. 2020.「*Saravatathāgatataṭṭvasaṃgraha*の説く āveśa 儀礼 — 金剛界大マンドラ章「成就が生じるための印に関する智」校訂テキストおよび和訳注 —」『本多隆仁先生古稀記念 摩訶衍の世界 智山学報第六十九輯』智山勸学会, pp.71-97.

密教聖典研究会. 1999.「Transcribed Sanskrit Text of the Amoghapāśakalparāja Part II」『大正大学総合佛教研究所年報』21, pp.(81)-(128)

密教聖典研究会. 2015.「*Amoghapāśakalparāja* Preliminary Edition および和訳註 — サンクリット語写本 f97v4-99r2 —」『大正大学総合佛教研究所年報』37, pp.(41)-(68).

水谷真成（訳）玄奘（著）. 1971.『大唐西域記』東京・平凡社. 中国古典文学大系22. 欧文資料

Goodall, Dominic and Harunaga Isaacson. 2016. “On the Shared ‘Ritual Syntax’ of the Early Tantric Traditions.” In: Dominic Goodall and Harunaga Isaacson (eds.) *Tantric Studies: Fruits of a Franco-German Project on Early Tantra*, Institute Français de Pondichéry; Universität Hamburg; École française d’Extrême-Orient, pp.1-76.

註

- (1) 本小論は2020年10月25日に行われた川崎大師仏教文化講座（於川崎大師教学研究研究所）の内容を文章化したものである。
- (2) 種村2010: 217を参照。
- (3) ここで言及している初期密教経典の特徴は、シヴァ教聖典に規定されているものと共通するものである。仏教・ヒンドゥー教を含めた初期タントラの “Shared ritual syntax” については、Isaacson and Goodall 2016を参照のこと。

- (4) 以下に要約されている箇所の子ンスクリット語テキストおよび和訳註に關しては、密教聖典研究会2015を参照のこと。
- (5) 毒性を有する物質や嫌悪をもよおさせる物質が呪術的な力を有するという概念は、仏教のみならず他のタントラの宗教にも見られる。Isaacson and Goodall 2016: 24ff.を参照のこと。
- (6) 当該儀軌のテキストは子ンスクリット語写本のff.19r5-23v2に見られる。当該セクションは全体として「cakrapāśavidhisādhan (輪霸索儀軌成就法)」というコロフォンタイトルが付されている。当該箇所の子ンスクリット語転写テキストは密教聖典研究会1999: (96)-(109)を参照のこと。
- (7) 「屍鬼二十五話」の和訳は上村1978を参照のこと。
- (8) 水谷1971: 332-333を参照。
- (9) 種村2020. 尚、和訳のセクション番号も当該論文に基づく。
- (10) 持金剛位と仏位=如来位が「悟り」として並列して言及されている点は、『理趣経』と共通するところである。
- (11) 『金剛頂経』の当該引用箇所につき続く箇所では「秘密法」と呼ばれるものが規定されている。具体的には拍掌を用いて、山をも自由にし、苦を取り払う。また、男女の身体に入ることについても規定されている。当該引用箇所や「秘密法」に共通しているのは、これらが仏の智の「アーヴェーシャ (憑依)」が前提となっているということである。『金剛頂経』におけるアーヴェーシャについては、種村2019を参照のこと。